テーマ
22　考古資料から民族はどう描けるか

河村　好光

日本考古学は、日本人種あるいは日本民族をどのように描いてきたのであろうか。

日清・日露戦争期の頃、八木奘三郎は、日本考古学が対象とする時代を先史時代と原史時代に区分し、それぞれ人種を論じている（『日本考古学』1906 中澤澄男と共著）。

先史時代は、石器時代。今の縄文土器・石器が記述の大部分を占め、弥生式土器はその上層位に認識されている。先史住民の人種として、神軍説、粛慎説を挙げ、明治維新後の新説として土蜘蛛及び蝦夷説、コロポックル説を挙げるが、坪井正五郎を支持しアイヌ説は否定している。

原史時代は、古墳時代のことで、神代の初めより推古天皇時代までが相当する。人種に関する考古学的見解として、天孫派・出雲派、土蜘蛛派・熊襲隼人に分け、前者を「共に大陸に関係を保てる種族」、後者をマレー族と連絡するものとする。この時代の担い手こそ、「秋津州の國土を経営し今日あらしめた吾人、天孫民族の祖先」であった。

八木の二時代区分は、石器時代人を先住民族とするモースらの見解を継承したものだが、石器時代人＝アイヌ説が優勢となるとともに時代認識にねじれが生じ、原史時代大和民族と石器時代人との併存が強調されるようになる。

高橋健自は、『考古学』（1913）で、石器時代民族を異種族の蝦夷・土蜘蛛とし、次のように論じた。「我々日本民族の古代史は、これらの異種族と接して或は征服し或は混融し或は撃退したる事実から構成される」。蝦夷占拠地は石器時代遺跡の分布著しい関東以北だったが、やがて北方に移り、子孫のアイヌが今なお残喘を北海に保つ。「我々は優勝者であって彼らは劣敗者」であった。

モースは大森貝塚に勾玉などの玉が伴わないことを強調したが、八木は前掲書で、当時、中国からの輸入を疑わなかったヒスイを先史時代にみとめ、石器時代人が中国と常に交通していたという「重大問題」を指摘していた。高橋はいう。石器時代のヒスイ大珠は、鋼鉄、金剛砂で穿孔されている。そうした進歩した文化は彼らになく、「我々の祖先なる大和民族」が中国からヒスイを輸入し、「先住民向けに製作」したに他ならない（「石器時代の勾玉に就きて」『人類学雑誌』31-1．1916）。

輸入ヒスイ加工説は、1921 年の慶州金冠塚の夥しいヒスイ勾玉発見で思わぬ展開にすすむ。

浜田耕作は、出雲玉作遺物にヒスイがないことに着目し、「南支那との交通が途絶え」ヒスイの輸入が停止した結果とみた。一方で、金冠塚のヒスイ勾玉の豊富さは、輸入経路にあたる朝鮮でも製作されたとの想像を禁じ得ない。「朝鮮の東南部には往古から、大和民族と相似た（或は同一の民族）が、否少なくとも同一文化圏に属する民族が占拠して」おり、ヒスイ勾玉の型式は「朝鮮南部をも包括した広義の『日本人』間に発生した」と論じた（「日本に於ける硬玉、軟玉問題」『出雲上代玉作遺物の研究』1927）。

浜田の広義日本人論は、併合後の植民地政策、学説としての「日鮮同祖論」を逸脱するものではなかったが、高橋、後藤守一の激しい反発を受け、立ち往生を余儀なくされる。

高橋は翌年、勾玉は我が祖先の独特なる遺物、朝鮮は我が国の領土の一部だったのであり、「わが文化の北上に成った」と反論した（『考古学講座 埴輪及び装身具』1928）。後藤も、「南朝鮮が上代に於いて、我が服属地であったことは国史上明らか」として同様に論じ、かつ、ヒスイ輸入説に疑念を表明した。雲南・ビルマの遠方から漢人が求めて送ったというが「なぜより多く自己に供しなかったのか」、入手しやすい「北支那の軟玉」をなぜ多く舶載しなかったのか（『考古学講座 上古の工藝』1930）。

ヒスイ問題は、糸魚川産地発見（河野義礼 1939）により決着するが、その前に、日本考古学から大陸・朝鮮半島、日本列島へと広がる技術、文化を水平的視点で論じる態度は後退していく。

後藤守一『日本考古学』（1927）は、日本考古学の対象を旧日本＝内地に事実上限るもので、人類

学者の説を挙げ、日本人は人種ではなく民族である。「先史時代人は我々日本人の祖先」と想定するべきとし、日本民族の来歴を大陸から列島先史時代に切り替えることを提案していた。

後藤は、戦時中、少国民に考古学と「八紘爲宇」の大理想との関わりを説いた（『先史時代の考古学』1943）。アメリカの考古学は、先住「アメリカ印度人」の研究にすぎないが、日本は違う。日本人の精神は何千年の間も変わらない。縄文式文化の人がヒスイを好んだとすれば、「彼らも日本人、とても人智未開の時代だと言えない」。日本人が日本を知るために考古学が必要。日本の国は何千年もの大昔から一度も外国に従えられたことがない、その上に万世一系の皇室を頂いている。どの外国にも自慢できることだ、と。

以上の考古学者の自民族論、人種交替説から一系日本人説への転換は、民族・人類学、優生学、民俗学を含めた学説の推移を大筋で反映する（小熊英二 1995『単一民族神話の起源』）。日本考古学は、国史の枠外にあったが、民族の来歴、履歴にまで口を閉ざしていたのではない。

敗戦後、神代史にかわり、土器や貝塚が日本人の歴史の黎明を語るものとなる。岩宿の発見により、洪積世人類の存在、縄文文化の始まりが認識され、先土器（岩宿）、縄文、弥生、古墳という時代区分が固まった。

戦前の人種・民族論は、対外戦争と領土拡大、他集団の統治と同化、その時局的変化と結びついており、特定の考古資料が民族精神の表徴のように扱われもした。大戦後、欧米では考古学的文化の分布を民族と定義する文化史考古学が批判の対象となるが、日本考古学でも、占領下の時期をすぎると、人種・民族の語が消えていく。

しかし、日本の国土（旧本土）に遺跡遺物をのこした人は皆、日本人の祖先だとする一系日本人説は継承された。悠久の文化を解き明かす考古学への期待を裏切らないためにも、先祖の遺跡を開発から守るためにも必要な了解であった。縄文人、弥生人は当時の日本人を語る用語として定着した。その延長に「上高森人」、「秩父原人」なる造語も生まれた。

日本考古学に即していうと、「民族はどう描けるか」ではない。描いてきたのであり、その功罪をどう認識し、違う描きができるか、否かだ。
現在、人種を国家に結びつける議論はないが、民族は、集団の歴史や文化を含意し、近代国家の国民に近い意味で用いられることが多い。ただし、民族＝国民を基準に歴史上の国家民をその接近の型に押し込めることでは、多様性を見失い、それ以前の人集団も理解できなくなる。

ここに、国家とは次元を異にして存在する、エスニシティに着目する研究に注目したい。その人集団に即して、他との文化的差異や境界の認識、集団への帰属意識の発生、維持、変化などを考古学的に明らかするもので、時代、地域、対象を限らず試みられることが期待される。

次に、歴史上存在した倭、倭人、倭国を、当時の民族集団にかかわる呼称とみなし、形成と展開、対外関係、変質と解消を考古学的に跡づける方法がある。律令国家は倭国ならざる国づくりの結果であるが、古墳時代の始まりも『魏志』に記す倭国成立と重なるとの見方が有力になった。倭の領域変化に着目すると、倭国は本州諸島の広範囲に及ぶ大領域だが、漢王朝時代の倭は北部九州を中心とする地域。弥生後期半ば以降に一つの大きな倭が形成されるのであり、弥生時代を民族形成の時代と位置づけることができる（河村 2010『倭の玉器』）。

戦後の日本考古学は、日本人のアイデンティティー形成の一翼を担ってきた。ただ、「縄文人」があたかも単一の大集団であるかの説明、どこの「弥生人」も倭人とする表現は、日本国土の住人は皆日本人、日本人は皆同じ精神をもつとの論法と同じで、いまの共生の時代、細やかさが必要だ。
なお一つ。領域論とともに文化を取り込んで民族形成を描くとき、大陸文化という要素は大きい。「日鮮同祖論」の批判的克服、大陸民との境界形成・共存という大きな視点は欠かせない。